
微妙

木月 愛美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微妙

【Nコード】

N9610B

【作者名】

木月 愛美

【あらすじ】

“微妙”としか言えないような、体験をしたことがありませんか。

東京から少し離れたところにある小さな駅。

宝くじを売る小さなお店。その前で宝くじの宣伝の看板を持って、立ち続けている。そして宣伝文句を永遠と口にする。そんなアルバイト。友達に愚痴を零したら、夢を売る仕事じゃんそんな白けててどうすんのかなと言われた。だがその友達というのは来月部長に昇進するとかいう超エリート。お前の言葉になんか説得力の欠片もねー。

またいつもの女子高生。僕を見る。毎日あそこで可哀相だなあとか思っているのだろうか。

学校から二駅目の、わたしの家から一番近い駅。階段を下りると小さな宝くじを売るお店と、ほんの小さなスーパー。学校がつまらないって訳じゃないけど、何か物足りない。スリルがないっていうか。だけどスリルを求めているかと聞かれると、それとはちょっと違う。或は、このままなんとなく大人ってやつになってしまうのかなあ。

またいつもの看板おじさん。宝くじの宣伝を言い触らす。寒い中ご苦労さん。

東京から少し離れたところにある小さな駅。スーパーの二階の小さな本屋。別に用などないが、ここは宝くじの看板おじさんの通学路だ。

東京から少し離れたところにある小さな駅。スーパーの二階の小さな本屋。女子高生は友達の奨めを受けていた。これだよ、これ。読んでみなよ。絶対泣けるから。友達は言った。気が向いたら読んでみるね。女子高生は返した。

突然、宝くじの看板おじさんの肩に振動が走った。何かにぶつかったのだと思い、肩の先を見た。

女子高生だった。

女子高生は迷った。宝くじの看板おじさんと女子高生。この微妙
としか言えない関係の中で、言葉を交わすべきなのだろうか。

「すみません」

「すみません」

先ず、謝らなくてはと思った宝くじの看板おじさんの声は女子高
生と重なった。

「あ、あ、こんにちは」

宝くじの看板おじさんが挨拶をしてきた。女子高生はすっかり動
揺してしまい、小さな声でこんにちはとぼそつと呟くことしか出来
なかった。

「知り合い？」

「……うん。宝くじの、いつも看板持つてる、おじさん」

「駅前の？」

「うん」

「それは微妙な関係だね」

女子高生とその友達の会話に、僕はなんらかの衝撃を覚えた。何
故だろう。どうしてなのだろう。

微妙な関係だね。

世の中、そんなことばかりだからだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9610b/>

微妙

2010年10月11日00時32分発行